

第35巻2号

2014年5月

目次

第38回日本遺伝カウンセリング学会学術集会 プログラム・抄録

大会長挨拶	藤川和男	1
会場アクセス・校舎配置図		2
ご案内		4
日程表(学会・委員会・理事会・評議員会)		8
プログラム		13
講演要旨		
特別講演	個人ゲノム情報を利活用する上での問題点と対処法の提案	鎌谷直之 24
招待講演	神経難病の治療と研究の現状と展望	戸田達史 25
教育講演	小児科領域の遺伝カウンセリングと遺伝カウンセラーの役割	岡本伸彦 26
	いまだ聞けないiPS細胞 なにができてなにが問題なのか	
	—ダウン症候群研究をひとつの例として—	北島康司 27
	皮膚科領域の遺伝カウンセリング:理論から実践へ	森脇真一 28
	循環器領域の遺伝カウンセリング	森崎裕子 29
シンポジウム		
1.	新しい胎児検査と遺伝カウンセリングに関する実施状況と課題	関沢明彦, 山中美智子, 佐藤智佳, 玉井 浩, 千代豪昭 30
2.	遺伝性乳がん卵巣がん症候群(HBOC)と遺伝カウンセリング	中村清吾, 関根正幸, HBOCの患者様, 新井正美, 金子景香, 三木義男, 岩永直子 35
3.	生殖補助医療と遺伝	井田憲司, 田中 温, 中岡義晴, 庵前美智子 41
ミニシンポジウム		
1.	遺伝医療チームにおける看護職者の役割—遺伝看護専門看護師に焦点を当てて	溝口満子, 須坂洋子 44
2.	遺伝医療のための基盤づくりを目指して—認定遺伝カウンセラーの取り組み—	鹿嶋(守井)見奈, 中川奈保子 45
市民公開講座		
	ダウン症児・者のよりよいのちを願って	篠原 徹, Brian Skotko 46
ランチョンセミナー		
1.	女性と遺伝カウンセリング—NIPTに注目して—	四元淳子 49
2.	多発性嚢胞腎と遺伝カウンセリング	花岡一成 50
3.	診療における次世代シーケンス解析—結果のまとめ方と伝え方—	黒澤健司 51
一般演題要旨		
口演		54
ポスター		91
若手奨励賞候補		113
索引		118
記事		
	日本遺伝カウンセリング学会役員名簿	43
	日本遺伝カウンセリング学会委員会委員名簿	45
	日本遺伝カウンセリング学会会則	47



日本遺伝カウンセリング学会

O-55

乳腺専門クリニックにおける遺伝カウンセリングの取り組み ～問診票の家族歴はどこまで信用できるのか～

Approach of the genetic counseling in Osaka Breast Clinic

秋丸憲子¹, 芝 英一¹

医療法人英仁会 大阪プレストクリニック¹

【背景・目的】

女性が罹患するがんの第一位は乳がんであり、その5～10%が遺伝性乳がんである。そこで、遺伝的な乳がん発症リスクを評価し、リスクが高い人に対する早期発見、早期治療を目指すため、当該者の適切な拾い上げの方策として、現状の初診問診票による家族歴聴取の有効性を評価し、問診票の改善を試みた。

【症例】

2012年8月から2013年12月までに初発乳がん手術実施の427例。

平均年齢52歳(28～85歳)

【方法】

初診問診票：乳がん家族歴の有無、有りの場合は、続柄を記載させた。

面談による家族歴聴取：術後、がんの疫学情報・遺伝性乳がん情報を提供し、家系情報を聴取した。

初診問診票と面談による家族歴有無を比較した。

【結果】

初診問診票：乳がん家族歴 有・無・不明は76例、322例、29例。

面談による家族情報聴取：乳がん・卵巣がん家族歴 有・無は114例、313例。NCCNの遺伝子検査基準に合致するものは、各々89例、113例。

初診問診票で家族歴が無・不明で面談で家族歴有：40例(9.4%、卵巣がん4例、乳がん36例)。この36例は年齢には依存せず、内4例では発端者以外に2名の乳がん患者が家系内に居た。第一度近親者、父方第二度・第三度、母方第二度・第三度近親者に乳がん患者が居る症例は、各々5例、12例、19例であった。

【考察】

初診問診票による家族歴聴取では不十分であった。

卵巣がん情報が聴取できておらず、患者が情報を持っていないケース、正確に書く意識が乏しいと思われるケースもあった。

面談による確認も十分とは言えず、父方情報不明確なケースが多い印象があった。

改善策：

家族の範囲、対象となるがん種を明確にする。

乳がん告知時に新たな問診票を渡し、自宅で家族と相談しながら確認できるようにする。必要に応じて、術前に、遺伝カウンセリングの案内を行う。

keywords

遺伝性乳がん、家族歴、問診票